

ー巻頭エッセイー

冷たくても温泉

金原啓司¹⁾




最近温泉に関する資料を調べていたところ、気になり始めたことがいくつかあります。温泉は日本の観光・保養施設としては無くてはならない存在の一つですが、そもそも「温泉」とは何なのか、という疑問です。温泉の「温」は文字どおり温かいことを意味していますが、日本では昭和23年に制定された温泉法により、地下から湧き出る25℃以上の水を温泉と呼ぶことができます。さらに療養的観点から特定物質が一定量以上含まれていれば25℃以下でも温泉と呼ぶことができます。この25℃は戦前日本の領土であった台湾の年平均気温からきているとのことです。今では何か奇妙な感じがします。自然科学的にはその地域の年間平均気温以上、また医学的には人間の体温以上を温泉とするのが妥当のようです。

ところで、入浴により寒冷を感じない温度はおおよそ34℃であり、これは不感温度と呼ばれています。従って、少なくともこの不感温度もしくは体温(36.7℃)以上の温度がないと人間は入浴で暖かく感じないはず。ちなみに温泉治療では38～42℃の渦流水で四肢を暖めると効果があるとされています。日本のように入浴を主とする利用法ではやはり体温以上の温泉が欲しいところですが、でも万一体温より低いものは温泉でないとすると、日本の温泉の約半数は温泉と呼べなくなり、社会的には大混乱を引き起こしそうです。

療養、休養を主目的に温泉が商業的に開発されてきたヨーロッパでは20℃以上を温泉と呼んでいます。英語では温泉をホットスプリング(hot spring)といいます。ウェブスター辞書ではhot springは98°F(36.7℃の体温)以上の湧泉、thermal springはその地域の年間平均気温以上の湧泉としています。また温泉地をあらわす言葉としてバース(bath)、

スパ(spa)が時々使用されます。バースはイギリス南部、またスパはベルギー東部にある著名な温泉保養地のことで、それらから由来した言葉です。なお、英語のバースに相当するドイツ語はバート(Bad)であり、ドイツ周辺にはバーデン・バーデン(Baden-Baden)をはじめ、このバートの文字がついた温泉保養地がいくつかあります。

日本では温泉科学をBalneology(本来は医学における浴療学をさす)とも呼ぶように、近代温泉科学はヨーロッパを中心に、主に治療・療養を目的に発展してきた経緯があります。温泉の性質・成因等を科学的に究明すること自体は大変意義のあることです。一方では、昨今の健康志向ブームや今後の高齢化社会到来を控えて、温泉施設と周辺自然環境を一体的なものとしてとらえた、ヨーロッパ的な温泉保養地のあり方が今以上に追求されても良い時期ではないでしょうか。温泉の温度(泉温)は温泉地の特徴を理解する上での重要な要素の一つではありますが、万一温度が低く(冷たく)ても加温すれば良いわけで、厳密な温度定義にはそれほど大きな意味があるとは思えません。むしろ、豊かな自然環境の中で、誰もが逗留できる健康的な温泉地であって欲しい、というのが筆者の感想です。皆様はいかがでしょうか。

温泉記号		
地形図上の温泉記号	天然温泉記号	
		
1900年～	1965年～	日本温泉協会(1976)

1) 地質調査所 統括研究調査官

キーワード: 温泉